鳴門教育大学研究紀要
第34巻　2019

# 中学生の合唱音取り用音源CDの制作とその利用について2

山　田　啓　明*，上　原　祥　子**

（キーワード：合唱，音取り，パート練習）

## ハレルヤコーラスの音取りCDの改善版制作とそれを利用した授業観察　山田啓明

### （1）はじめに

本論文は昨年度，平成29年度の紀要論文[1]の続編である。そもそものきっかけとなったのは，平成28年度の大学院の授業，「教育実践フィールド研究」（以下「フィールド研究」と省略）の4名の受講生たちと研究課題として取り組んだ，本学附属中学校で毎年9月初旬に行われる文化祭の出し物，吹奏楽部と3年生によるヘンデル作曲のオラトリオ『メサイア』より「ハレルヤ」コーラス（以下ハレルヤと省略）の合同演奏の音取り補助であった。

文化祭のハレルヤは附属中学校において40年近く続く伝統行事となっていて，演奏会後に行ったアンケートの回答からも，生徒達がこの演奏に伝統への参加と達成感とを味わっていることが示されている。一方，この曲の練習が3年生の音楽の授業時間を圧迫し，教師側にとっても大きな負担になっている事が明らかとなった。そこで，フィールド研究の授業では，最後に本学の頃安利秀教授(テノール)，非常勤講師の真鍋美恵氏(ソプラノ)，筆者の妻で二期会会員の小川明子氏（アルト）らの協力を得て，それに筆者本人（バス）も加わって，過去の附属中学校のハレルヤの本番演奏の音源に各パートを重ねて録音することで，ソプラノ，アルト，テノール，バスそれぞれのパート用に音取り用のCDを作成し，これを本授業の最終的な成果物として，附属中学校の上原祥子先生に提供し，29年度の授業にて活用していただくことにした。そして，昨年度（平成29年度）の本学紀要論文『中学生の合唱音取り用音源CDの制作とその利用について』では，29年度における，その音取り用CDを実際に利用してみての効果と，問題点の検証であった。そして，本論文では，それらの検証を踏まえての新たな音源CDの制作および，それらの利用した得られた効果と明らかになった問題点の検証である。

### （2）平成29年度版ハレルヤ音取りCDの効果と問題点

#### 1）効果

① 最初に各パートの音取りCDを繰り返し聞くことで，楽曲全体の流れや自分のパートの旋律，旋律と言葉の関係などの理解をすることが昨年度までに比べて，スムーズに行うことができた。特に例年より男子の音取りが早くできた。

② 例年授業者が男子につきっきりだったのが，男子がCDを使って練習をしている間に女子の指導ができるようになったことで，練習をスムーズに進めることができるようになった。

③ 全体の演奏の上に，いずれかのパートを強調したCDを聞くことで，生徒たちが合わせ練習で困難に感じる「他の声部とのかかわりを意識する」ことができた。

④ 授業者が女声であるため，男子生徒が声域や声のイメージをつかむことが難しかったが，男声によるCDを活用することで，特に男子生徒が例年よりスムーズに練習に取り組めたことが実感できた。

#### 2）問題点

① これは，音取りCDの問題ではないが，授業の最初に聞く「模範演奏」の演奏CDが本来の原調D-dur ―― ただし古楽のためやや低めのピッチで演奏されている ―― ため，実際に生徒が演奏するC-durとは乖

*鳴門教育大学芸術系コース（音楽）
**鳴門教育大学附属中学校

離があった。

② 拍節が分かりにくいため，CD に合わせて歌うということは，なかなか難しい。音楽の流れをつかんだり，理解するために CD を活用し，実際に音取りをするために歌唱する時には，パートリーダーがピアノで旋律を演奏する方が分かりやすい。

③ アインザッツに困難を感じる生徒が多い。

④ トラックを細分化しすぎてしまい，練習でのトラックの選択が煩雑になった。

⑤ 音取り用でなく，四声部合同で練習する際の純粋な伴奏 CD がほしい。

### （3）平成30年度版ハレルヤ音取り CD 作成にあたって

上記①～⑤で明らかになった問題点について，それぞれ以下の①～⑥ように改善を図ることとした。

① の模範演奏の CD の演奏のピッチが生徒が実際に歌う版のピッチより高すぎる点については，パソコンの波形編集ソフトを利用して，ピッチを下げた音源を用意する。

② 音取り CD に拍子が分かるようにクリック音を入れる。

③ 各パートのアインザッツ，すなわち長い休みの後の「入り」の直前に「サン，ハイ」など声のガイドを入れる。

④ トラックの分割については，毎回の授業において授業者が生徒に指定する練習範囲に対応させる。

⑤ 新たにピアノ伴奏のみの CD を録音，制作する。

⑥ 指揮者が実際にハレルヤを振る映像とともに伴奏がながれる動画ファイルを録画，制作する

それでは以下に具体的な作業について記述する。

### （4）平成30年度版ハレルヤ音取り CD 作成における具体的作業

#### 1）模範演奏音源のピッチを下げる

音源全体のピッチの上げ下げは，波形編集ソフトを利用すれば，微細なレベルで調整可能である。平成29年度の授業で使用していた CD はクリストファー・ホグウッド指揮，エンシェント室内管弦楽団のものであった。上原先生によれば，30年近く前から附属中学校で所蔵しているものだそうである。授業の冒頭および振り返りで２度流される演奏を聞いた筆者は，ボーイソプラノが歌っているせいか，美しいが元気がないという印象を持った。筆者の手元には定評あるガーディナー指揮のモンテヴェルディ合唱団の録音，ビーチャム指揮のグーセンス版２種類の CD があった。グーセンス版メサイアには本来の編成にはない，ホルンやトロンボーン，シンバルやトライアングルといった，現代の大オーケストラのために書かれたものは，色彩感も素晴らしく，筆者の個人的な好みである。これら２種類の演奏を筆者の研究室の MacBookPro に取り込み，波形編集ソフト Sound it！5.0を使って，ピアノなどを補助的に使いながら，あくまで筆者の主観において C-dur までピッチを下げた。この音声ファイルをさらに iTunes に取り込んで，ガーディナー版，ビーチャム版それぞれ別に CD に焼いて，上原先生に提供することにした。

#### 2）拍子が分かるようにクリック音を入れる

すべての音取り CD の元となる附中の演奏の音源に合わせてクリック音を録音したトラックを制作，このトラックをさらに昨年制作した各パートの音源に重ねる作業を MacBookPro 上の音楽制作ソフト GarageBand を利用して行った。クリック音には何を用いようかと悩んだが，録音作業のしやすさからクラベスを実際に叩いてマイクで収録することにした。おそらく拍そのものよりも，ポリフォニー音楽の性質上，何拍目なのかが分からなくなる生徒が多いのだろうと推測したため，１拍目の音を高くして強調することにした。GarageBand では多重録音機能があるので，１本目のトラックに取り込んだ附中の演奏を再生してヘッドフォンで聴きながら，それに合わせてマイクの前でクラベスを叩いて２本目のトラックを録音するという作業を一人で行った。こうして出来上がったクリック音のトラックを，たとえば昨年の音取り用に作ったアルトパートのファイルにコピーアンドペーストで付け加えれば出来上がりである。ところで余談であるが，クラベスは本来受ける方（叩かれる方）のクラーベ(単数形)を載せる手のくぼみの大きさを変えることで音の高さを変化させることができる。ところが，最近本学で購入した木製クラベスの多くが，音の高さをほとんど変えることができない。合成樹脂製のクラベスに音高の変化をつけにくいことは筆者も知っていたが，木製であっても，恐らくは材質や製法の違いによって音高の変化の多い，少ない楽器がある，ということをつい最近になって知った次第である。

**3）音取り音源に声によるアインザッツのガイドを加える**

これは問題点②とも共通することであるが，ポリフォニー音楽では各声部がリズム的に独立して動くため，何拍目かが分からなくなり，とくに長い休みの後のアインザッツに困難が生じやすい。そこで「サン，ハイ」など声によるガイドを加えることにした。自分の声で録音することも考えたが，授業者である上原先生本人の声がよいだろうと判断し，平成30年の 4 月に入ってから大学までご足労いただいて，下記の **5**）の指揮の録画と同日に録音作業を行った。上記 **2**）で，クリック音が入った各パートの音取り音源は出来上がっていたので，これらを上原先生ヘッドフォンで聴いてもらいながら，各パートの入る直前に「サン，ハイ」とか「イチ，ニ，ハイ」といったアインザッツの音声ガイドを別トラックに録音するのである。この作業をソプラノ，アルト，テノール，バスの都合 4 回行った。

蛇足であるが，上原先生が帰られた後に，ピアノで歌い出しの音のガイドも直前に加えるとともに，筆者の判断で，「サン，ハイ」などの音声を切り出し，足りないと思われる部分に付け加えた。これで，各パートの音源は出来上がりである。

**4）音取り用音源のトラック分割と CD 化**

平成29年度版の音取り CD では，各パートに多少の違いはあったものの，例えばソプラノパートを18のトラックに細分しておいたのが，結局練習の際の頭出しが煩雑になってしまうだけ，という結果に終わった。そこで上原先生より，曲を 4 つに分けて練習を進めているので，トラックは 4 つあれば十分ということであった。そこで，

Track 1 ：最初から最後まで，
Track 2 ：33小節から最後まで，
Track 3 ：52小節から最後まで，
Track 4 ：74小節から最後まで。
以上 4 つが音取り練習用のトラックで，これらに加えて

Track 5 ：音取り用音源の基礎となった過去の附属中学校のハレルヤ全曲，
Track 6 ：後述するピアノの伴奏（通し）

**5）ハ長調版のピアノ伴奏 CD の制作**

これには準備に相当時間がかかった。当初は専門のピアニストにお願いしようかとも思ったが，録音で残すレベルを仕事として依頼する場合，どの程度の完成度で演奏者と折り合いをつけるか，また相当な準備を必要とする仕事に謝礼を出す余裕もないため，無理を承知で自分でピアノを弾いて録音することにした。ただし，平成29年度は筆者自身が橋本國彦の歌曲集の CD の録音の準備にとりかかっており，実際に練習にとりかかったのは，歌曲集の録音セッションが終わった10月以降にずれ込んだ。ようやく録音できる状態にまでたどりついたのが 3 月も下旬であった。とても完成度が高いといえる代物ではなかったが，ちょうど 3 月に入って調律の終わった研究室のピアノで録音を行なった。

**6）ハレルヤの指揮付きの伴奏動画ファイルの制作する**

5）のピアノ伴奏 CD が制作できた時点で，ようやく自分の演奏にも自信を得たので，ようやく上原先生に指揮をしていただく決心をした。先生に連絡し，平成31年度の授業の打ち合わせも兼ねて 4 月 7 日の土曜日に本学までお越しいただいて，実際に指揮を振っていただき，それに合わせてピアノの演奏した動画を撮影した。ところが，編集の段階で失念し，その後の作業をせず，先生に動画をお渡ししていなかったことが，本稿執筆（9 月 1 日）の時点で明らかとなった。恐らくは自分自身のピアノ演奏の出来の悪さと，先生自身，動画を撮られることに決まり悪がられていたことが，潜在意識的に働いていたのだろうが，実際に使っていただけるかどうかは別として，作ってお渡ししておけばよかったと悔やまれる。

以上の作業を通して，新たな範唱 CD，ソプラノ，アルト，テノール，バス 4 パートの新しい音取り用 CD と，ピアノ伴奏音源とを，練習開始前に上原先生にお渡しして，実際の授業で使っていただき，また筆者自身も授業を参観して，先生にインタビューして使い勝手や前年との生徒の反応の違いなどを伺うこととした。

**（5）授業観察（ビデオ撮影）**

平成30年度の本年度，観察させていただいのは6月27日水曜日4校時目（11：55～12：45），3年1組のクラスの5回目の授業である(29年度は6回目の授業を観察した)。黒板にあらかじめ書かれた本時の目標は，①パート内でしっかり声を合わせよう，②他の声部とのかかわりを意識して歌おう，とあり，その下には学習の流れとして①目標の（ワークシートへの）記入，②CDで確認する，③パート練習，④合わせる12：20～，⑤振り返り12：40～と授業の計画が書き出されていた（写真1）。

写真1

授業が始まる前の音楽室の光景だが，教室の前と後ろ，右手の壁際に置かれた3台のグランドピアノの前に，おそらくピアノが得意なのであろう，生徒たちがそれぞれ陣取り，思い思いにピアノを叩いて遊んでいるのを他の生徒たちが囲んで聴いている。非常に明るい雰囲気。一人の生徒はラグタイム風の音楽を即興で弾いているのが結構サマになっている。

なお，ハレルヤの楽譜兼ワークシートは授業の度に配布，回収している。これでは予習復習ができないが，忘れ物が多いためやむを得ないそうである。この日も授業前にあらかじめ楽譜の配布を行っていた。さてチャイムが鳴って着席するも，なかなか私語はおさまらないが，先生の「口を閉じて」の一言で教室は静かになり，「起立，礼」の号令とともに授業が始まった。

先生は冒頭，「今，それぞれはすごく声が出てるけれど，パート内でちょっとガタガタ。声の質感とか音量を合わせようと意識しながら歌っていきたい。前回の授業で最後に4声で合わせてみたけれども，パート練習だったら歌えるけれども，皆で合わせたら迷子になったとか，グジャグジャになったといった意見があった。女子同士，男子同士で2声は意外といけるけれど，4声になると分からなくなる。特に78小節目，86小節目が分かりにくいという人が多かったので，範唱CDをかける時に，他のパートとの関わりを意識しながら，楽譜を見て自分のパートの出を確認して下さい」といった趣旨の説明をして，範唱CDでハレルヤを1回流した。今回新たに作ったCDである。生徒たちは手元の楽譜を見ながら聴きいっている。

CDを聴き終わり，先生は曲の前半は復習ができているが，後半が手薄になっているので，パート練習は終わり（75小節）から前に戻ってゆくやり方で練習を進めるように生徒たちに指示した。そして男女を分けて，女子は音楽室に残し，男子は別教室に移ってそれぞれパート練習に取り組んだ。筆者はとりあえず，先生と男子生徒について1階上の第3多目的室に移動して授業観察を続けることとした。

第3多目的室は教室2つ分位の広い部屋で教室前方にグランドピアノが置いてあった。先生はピアノの周囲にバスの生徒たちを集めて，早速パート練習を開始。テノールの生徒たちは教室の一角の机の上に据えられたミニコンポの周囲に集まって練習を始める（写真2，3）。ただし，2つの集団の距離が近いので，音が混じり合っ

てしまい，特にミニコンポで練習しているテノールはスピーカーからの音量が足りずに練習しにくそうである。そのせいか，あまり熱心には見えない。教室は広いので，もっと離れればよいのにと思ったがコンセントなどの事情もあるのかもしれない。バスは先生の直接指導ということもあり，真剣に練習している。テノールも次第に真面目に練習。ただし，約１名，音が低くてはずれっぱなしの生徒がいる。練習の途中まで観察して，残された女子の練習の進み具合が気になったので，音楽室に戻ることにした。

写真２バスパート練習

写真３テノールパート練習

階下の音楽室に戻ってみると，教室の前のピアノの周囲にソプラノ，後ろのピアノにはアルトが集まって練習している（写真４，５）。ソプラノは CD もピアノも使わず，パートリーダーとおぼしき子が，手で拍子を叩きながら，他のパートを歌っていつつ練習を進めている。一方アルトは少し離れた机の上のミニコンポで音取り用の CD を大音量で流しながら，ピアノの前に一人が座ってアルトパートを弾いている。途中から CD を止めて，練習箇所を指示しながら練習を進めていた。パートリーダーのピアノは力強く正確で，皆をしっかりとサポートし，なおかつリードしていることに感心した。

写真４ソプラノパート練習

写真５アルトパート練習

しばらく練習したのち，アルトからの呼びかけでソプラノが教室後ろのアルトに合流。曲の最初から一緒に合わせて練習を始めた。音取り CD は使わず，一人が手を叩いて拍子を取り，一人がアルトパートをピアノで弾きながらの練習である。ただし，ソプラノが自信一杯の歌声で綺麗に合っているのに対し，アルトの中には音が取れていない生徒もいた。

今度は，アルトパートの音取り CD をかけながら，ソプラノとアルト一緒に最初から再び練習。今度は CD に拍子が入っているので手拍子は叩かず，アルトはパートリーダーのピアノによるサポートを受けながら歌う。12時20分を回り，曲が終わりに近づいたところで男子たちが先生とともに戻って来た。

ここから全体の合わせである。先生の指示により，あらかじめ黒板に書かれた図（写真６）に従って各パートごとに教室の全体に広がった（写真７）。

まずは51小節から練習。アルトの音取り CD をかけて全員で歌うが，いきなりでは歌えず，先生がテノールパートを歌って加勢する。しかしバスはボロボロだったので一旦ストップ。「もう一回行きます。」との言葉で再挑戦。先生はバスパートを加勢しながら，「アルトもっと出してよ」と指示。先生に助けてもらってバスも声が出てくる。先生はテノールとバスの間を往復しながら両パートを加勢している。曲がなんとか形になってきた。歌い終わった後，私語もありザワザワしているが，生徒たちも成果を感じてやる気が出てきているのが分かる。

先生「75からもう１回行きます。」反則だとは思ったが，ここで筆者バスパートの加勢に入った。歌った後，

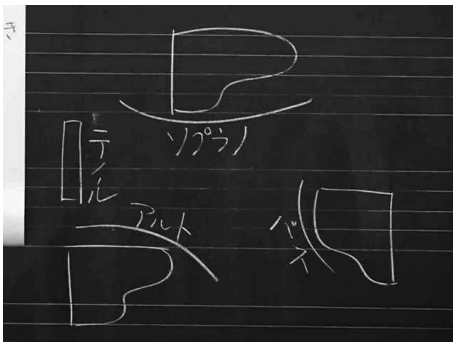


写真６

写真７

生徒たちから拍手をもらう。先生「33から。ここがちょっと音が迷子になりやすいから。」しばらく部分練習をしてから今度は最初から。時間を見計らって先生は途中で音取りCDを止める。

先生「では，今度は音をなくして，ピアノ伴奏で，じゃあ最後ね。最初から。アルトいけるかな。アルトいけますか？アルト結構しっかりめに歌ってね。」今回新たに用意したピアノ伴奏のみのCDを使って全体を最初から通した。練習が終わってテノールとアルトのアインザッツについて注意を与えたのち，授業の最初に流したのと同じ範唱CDを流しながら，生徒たちに本時の練習の振り返り，前回の練習で初めて他のパートと４声で合わせた時と本時とで自分がどうだったのかを楽譜兼ワークシートに書き込む作業を行い，来週は時間割の都合上練習がないこと，再来週の第６回目から他のクラスとの合同練習となることを伝えて授業を終えた。

なお，ここで気づいたことを一つ付け加えておきたい。昨年授業観察したパート練習では，４パートとも音楽室で行っていたため，全員の声やCDの音が混ざり合って非常に劣悪な練習環境であった。今年はそれが男声と女声と別室に分かれ，まだ不満は残るとはいえ，練習環境としては大幅に改善されたことは強調されてよい。

**（６）上原先生とのインタビュー**

**（５）**の授業が終わった後，昼休みの時間に上原先生へのインタビューを行った。実はインタビューをした段階で私と上原先生ともに事実誤認があったようである。前年度に授業を観察，インタビューしたのが2017年６月21日，今（2018）年度が６月27日であった。１週間遅かったことと，今年度あまりに出来が良かったため，1，2回分練習が進んだ状態だと両者とも勘違いしていたわけだが，記録を見ると29年度の授業が第６回目，30年度の授業が第５回目であった。実は，30年度のほうが練習は１回少なかったわけである。ただし，いずれも他クラスとの２クラス合同練習に取りかかる前の最後の練習であった。とにかく，私も先生も昨年とは違うと感じていたことを分かっていただくため，インタビューの一部を紙幅の都合で編集の上，以下に再録した。

山田：いや本当に今日，見せてもらって，まあ，去年見せていただいたよりは１，２回練習が進んでる段階ですね。

上原：はい，そうですね。

山田：（生徒達が）すごい声が出てて…。去年と比べると。まず子供達が楽しんでるな…。

上原：もう，それは…。まあ，やっぱり，ちょっと５回目でダレてきたとこはあるんですが，１回目，２回目の練習の時は，もう子供達は歌いたくて歌いたくて仕方がないというか，テンションが，授業―（不明）―最後で，恐ろしいくらい，どのクラスもそうなんですが，やっぱり曲の持つ力なのかなあ，と思って，でも，今まで，３年生がずっとしてきているから，というのでそれなりにやってきたところはあるんですけれど，こんなになんか，授業で，テンションが上がって，みんなが口ずさんで口ずさんでするっていうのは，初めてかなとは思います。

山田：それはやっぱりCDを使ったってのはありますかね？

上原：そうですね。

山田：それよりは学年のカラー？

上原：学年のカラーもあると思うし，やっぱりでも CD を最初に使ったので，それは，どの音を響きの中で歌ったらいいのかということと，子供はやっぱり入るタイミングがわからないので，自分たちのパートだけで練習してるのは，それはやっぱりカウントが入って，サンハイが入ることによって，それが分かったっていうのは，パート練習の取っ掛かりとしては，去年とか一昨年とかとは，やっぱり，最初，子供のピアノとだけやるのとは，全然違います。

以下略。

どうだろうか。１回目，２回目の練習の時から子供達が歌いたくて歌いたくて仕方がない，テンションが恐ろしいくらい，こういうのは長年やってこられて初めてとおっしゃる先生の口からも，昨年と比べて練習回数を勘違いするほどの著しい進歩が見られたことが分かっていただけたろうか。

**（7）今後の課題**

インタビューの中で明らかとなった今後考えられる改善点としては，以下のとおりである。

① 練習が進んで，声が出てきたときに伴奏が聞こえなくなるので，より伴奏の音量が大きい音取り CD を制作する。
② 上原先生本人が指揮した映像は使いたくないとのことなので，例えば私が指揮した姿のピアノ伴奏動画を制作する。
③ ②で作った動画に歌を重ねて新たな音取り CD および音取り動画を制作する。

ただし，①はすぐに実現可能性が筆者にも思い浮かぶが，②，③は動画を撮影し，動画に同期させながら音声を録音しなければならず，具体的な方策が筆者には思い浮かべられない。まず，音はなしでカメラに向かって自分が指揮している動画を撮る。次にその動画を再生しながらピアノを弾いて音を録画するわけだが，音声ファイルの多重録音するように，動画ファイルに音声ファイルを多重録音していけるような機能のパソコンソフトや機材を筆者は寡聞にして知らない。当然映画やテレビなどの制作現場では，使われる技術なので入手は可能なのであろうが，実は，指揮に関する他の教材制作にあたっても同じ問題に直面しており，目下思案中である。

**（8）省察**

**（6）**のインタビューでも明らかとなった前年と今年の違いについて，その原因について少し考えてみたい。実は前年の授業の前後に流される範唱 CD（ホグウッド盤）は**（4）の１）**でも書いたが，ややおとなしすぎる演奏であった。これをより活発な演奏に変えたことが，子どもの琴線に触れた可能性がひとつ考えられる。ただ，それ以上に今回の結果につながったのは，音取り CD にクリック音で拍子を入れたことと，「サン，ハイ」というアインザッツのための音声ガイドを入れたことであろう。上原先生によれば前年も今年も練習の前に各パートでまず音取り CD を繰り返し聞いたそうである。これは筆者の想像だが，音取り CD にクリック音，さらに「サン，ハイ」というガイドが入ったことで，生徒たちの心理的負担が相当下がったのではないだろうか。ここで「アフォーダンス」なる心理学用語を持ち出すまでもないことだが，難しいポリフォニックな合唱曲を歌うという課題を前にして，「これなら自分にもできる」という感覚が，昨年の音取り CD では子どもに生まれず，今年の CD では生まれた，と考えることができる。だからこそ，インタビューにあるように，まだ１回目，２回目の練習の時から子供達が歌いたくて歌いたくて仕方がない，という状況が起きたのだと思われる。

課題に取り組むにあたって「やればできる」という感覚を持てるかどうかは，学習意欲に強く影響すると考えられる。生徒たちの意欲，すなわち「やる気」を引き出すことができたという点においては，音取り CD の制作というプロジェクト，そして今年の改善は大成功だったといえるだろう。

もちろん，こういった音取り CD を安易に授業で用いる弊害も忘れてはならない。前回の論文で共著者の頃安

利秀も指摘していたことだが，楽譜を読むという基本的な作業を音取りCDでスキップしてしまう，ということは「読譜力を身につける」という学習目標を無意味化してしまうような行いである。これはより根の深い，大きな問題なのでここではこれ以上立ち入らないが，今の平均的な日本の中学生に数カ月の練習期間（それも週１の音楽の授業だけ）でハレルヤを歌わせようとするのは音楽科の教師一人にとっては負担が大きすぎるのである。すでに「伝統」となっている文化祭でのハレルヤの教師への負担を減らす，というのが本論文のもととなったフィールド研究の授業の出発点であった，という点をあらためて確認して本論文を終えたい。

## 授業者としての立場から　上原祥子

### （１）本年度の「ハレルヤコーラス」の取組

本年度は学校行事の関係により，練習の開始が昨年度よりも３週間程遅れることが予想されていた。したがって，２年生最終の音楽の授業で，事前学習（楽曲の背景や作曲者について，範唱CDや先輩の演奏CDの鑑賞，「クラシックミステリー名曲探偵アマデウス」（NHK）の視聴を行った。

本年度の練習実施については，以下表１の通りである。

表１

| | 時期 | 練習内容 |
|---|---|---|
| ① | ６月２週目 | パート決め・パート音取り①４～21小節目 |
| ② | ６月３週目 | パート音取り②～22～50小節目 |
| ③ | ６月４週目 | パート音取り③51～74小節目 |
| ④ | | パート音取り④75～94小節目 |
| ⑤ | ６月末～７月１週目 | 学級確認練習 |
| ⑥ | ７月１週目 | ２クラス合同練習① |
| ⑦ | ７月２週目 | ２クラス合同練習② |
| ⑧ | ７月３週目 | 学年練習①② |
| | 夏期休業中 | 暗譜の課題 |
| ⑦ | ８月４週目 | 学年練習③④ |
| ⑧ | ９月３日 | 学年練習⑤ |
| ⑨ | ９月５日 | 学年練習⑥ |
| | ９月７日 | 文化祭本番 |

学級によって，若干の進度の差はあった。学級での確認や２クラス合同練習は昨年度より１～２回程度少なくなった。また，３年生の音楽の授業は週１回であるが，練習時間の確保ために，他教科や学活の時間をもらい補充した。学年全体練習は，例年通りの時数が確保でき，学級確認練習や２クラス合同練習の内容を学年全体練習の中に取り込んだ。

### （２）授業の実際

#### １）生徒の実態

本年度３年生は，男子78名，女子81名である。男女の仲も大変よく，何事にも前向きに取り組める雰囲気がある。普段の音楽の授業においても，主体的に音楽活動に取り組むことができている。また，男子生徒にしっかりと歌える生徒も多く，これまでの合唱においても安定感のある響きとなっていた。２年生最終時の，ハレルヤの事前学習の時より，ハレルヤコーラスに対する興味・関心や意欲も高く，練習の開始を楽しみにしてくれている生徒も多かった。したがって，パート練習の１回目より，パートリーダーが中心となり，ピアノで音を取ったり，CDを活用したりしながら大変意欲的に取り組めていた。また，他の学級の進捗状況も気になるようで，自分の学級が他の学級より「上手に歌いたい」「早く音取りを終わらせたい」といったような感想もよく聞かれた。一方で，歌に苦手意識をもつ生徒や，意欲はあるが技能面が伴わないため思うように歌えない生徒もどの学級にもおり，パート練習に非協力的な姿勢になってしまう場面も見られた。

### 2）平成30年度版 CD を活用した練習

#### ①　模範演奏音源

目標内容の確認や１時間の振り返りのために，毎時間活用する模範演奏音源 CD である。本年度は，生徒の楽譜と同様の C-dur にピッチを下げていただいたガーディナー指揮のモンテヴェルディ合唱団の CD を使用した。生徒は，音楽全体の流れを把握したり，自分のパートのアインザッツを確認したりすることを目的としているため，昨年度までと大きな差異はないように感じた。

#### ②　平成30年度版ハレルヤ音取り CD を活用したパート練習

CD に録音されたものは，拍節が分かりにくいということ，アインザッツに困難を感じる生徒が多いということが平成29年度版練習用 CD の大きな課題であった。まず，この２点を改善していただいたおかげで，本年度はよりスムーズにパート練習をパートリーダーを中心として進めることができた。クリック音が入ることによって，パート内での拍節感がそろいやすくなった。また，小節頭が明確になった。アインザッツのガイドを加えることによって，ポリフォニー部分における入りが生徒にもよく分かり，他声部の音も入っているため，慣れてくると他声部との関わりから自分のパートのアインザッツを理解することができていた。平成29年度版と比較すると生徒の反応より，音取り CD を活用することがさらに効果的になり，第１時のパートでの音取りから，男声パート，女声パートともに活用率も高かった。「他の声部を意識しながら歌唱する」という練習の際には，他のパートの CD 音源を用いて繰り返し練習を行った。毎年，自分のパートの音だけを聴きながらであると歌えるが，他のパートと合わせた時につられて歌えなくなると　いうことでつまずく生徒も多いため，他のパートと合わせる前に，CD を活用して他声部を聴きながら歌うという練習にも有効であった。しかし，昨年度の課題でもあった練習環境については，本年度も完全に解消されてはいない。生徒管理の問題やステレオの台数に限りがあり CD デッキを使用するため，「練習の際に他のパートの声と混じってしまいなかなか聴こえない」「自分たちの声で CD の音がかき消されてしまってずれてしまう」というようなことは本年度もあった。また，CD 音源自体も音取りパート用のパートの歌を強調するゆえに，伴奏が弱くなっており，生徒から聴こえづらいという意見もあった。

#### ③　ハ長調版のピアノ伴奏 CD を活用した練習

文化祭での本番は，吹奏楽部による伴奏である。練習での合わせの際にピアノ伴奏となるが，授業者は簡易伴奏しか演奏できないことと，伴奏をしながら４声の生徒の歌を聴き指導するということは難しいため，ピアノ伴奏のみの練習用 CD を依頼した。主に学級や２クラス合同，学年全体練習での通し練習の際に活用した。通し練習の際の確認という点で大変有効であり，授業者も指揮や生徒への声かけを行いながら練習を進めることができ助かった。しかし，山田先生と十分なテンポ設定やブレスの間等が打ち合わせができておらず，歌とずれてしまう部分やアインザッツが不明瞭になる場面があった。また，テンポについては，合わせの初期に使用する少しゆっくりめに演奏されたものと，本番と同様のテンポのものとがあればよいと感じた。

### （3）次年度「ハレルヤコーラス」に向けて

H30年度版による練習 CD の活用によって，来年度も練習を進める予定である。来年度も練習日程については本年度同様にタイトな計画になることは予想される。限られた時間の中でできるだけ生徒に充実感や達成感，またハレルヤコーラスによる感動体験，先輩とのつながりや附中生としての存在感を味わわすことができるだろうか。ハレルヤコーラスについては，音楽科の授業のみにとどまらず，特別活動の目標や意義も踏まえている。音楽科の目標の達成をすることはもちろんであるが，決して技能面だけに終始することなく練習を進めるにあたって，補助教具として練習用 CD は有効である。また，市販されているものとは異なり，授業者や生徒のニーズに合った練習用 CD となっているという点においても授業での使用は大変便利であった。

## 参考文献

1　山田啓明，頃安利秀，上原祥子「中学生の合唱音取り用音源 CD の制作とその利用について」『鳴門教育大学研究紀要』第33巻（2018）pp. 426－435

# Making and Using "Rehearsal CD" for Chorus at Junior High School 2

YAMADA Hiroaki* and UEHARA Shoko**

(Keywords : Chorus, Sight-Singing, Section Rehearsal)

Junior high school students are not always able to sight-sing in a chorus. As the grade goes up, sight-reading becomes more and more difficult in music class. Nowadays, many "Rehearsal CDs" or so-called "Single-parts CDs" are on the market, but they are not always usable in class at junior high school because of the copyright. This paper, the sequel to last year, reports on the process of making a new "Rehearsal CD" of the "Hallelujah" chorus of Handel's Messiah to support music classes for third-year students at Fuzoku middle school attached to Naruto University of Education. It reports also on the usability of the CD through video-based class observation and an interview with the music teacher.

*Arts Education (Music), Naruto University of Education
**Fuzoku middle school attached to Naruto University of Education